

## 10.3 引用文献・参考文献の書き方

### ● 引用と著作権

他人の書いた論文などを引用する場合には、その人の著作権を侵害しないように注意する必要があります。皆さんは意識することが少ないかもしれませんが、全ての文章は著作権で保護されています（文章だけでなく音楽、絵画、プログラムなどにも著作権があります）。論文だけでなく新聞記事やインターネットのWebページなどにも著作権があります。そして、著作権を侵すことは違法行為にあたります。

著作権の侵害となる行為には様々なものがありますが、正しい方法を用いずに他者の文章を引用することは著作権侵害にあたります。そのような引用を行っているレポートや論文は、大学内であれば教員に受けとってもらうことができません。また学術雑誌に掲載された後に著作権の侵害が発覚した場合には、重い責任を問われることもあります。では、どのような方法で引用をすればよいのでしょうか？

#### POINT !

この5つの項目は、著作権法第20条、第32条、第48条に定められています。

# 1

#### 公表された著作物であること

公表された著作物の引用は、一定の範囲内であれば著作者の許諾を必要としません。個人の日記・手紙などの未公表のものを引用するときは、著作者の承諾が必要です。

# 2

#### 引用が公正な慣行に合致していること

公正な慣行とは曖昧な規定ですが、次のようなことが考えられます。まず自分の意見と引用部分をしっかりと分けている必要があります。またむやみな引用は避けて、客観的に必要と思われる範囲のみにしなければなりません。

3

**報道、批評、研究その他の目的で、正当な範囲内であること**

あまりに多量の引用は避けるべきです。1つの引用が何ページにも及んだり、論文のほとんどが引用といったものは正当な範囲とは言えません。

4

**原文そのままであること**

引用する文章は、原則としては一言一句変えずに引用する必要があります。誤字などもそのまま引用し、原文のままという意味の(ママ)という文字を挿入します。ただし、ある章全体を参考にした場合等には、要約して引用することも可能です。その場合にも原文の意図が変わらないように注意することが必要です。

5

**出典を明示していること**

引用元をはっきりと示す必要があります。著者名・書名(雑誌名、論題)・出版社・発行年・ページ数などを明記します。出典がはっきり分かれば良いので、いずれかの項目が省略されたりすることもあります。出典を示す形式は基本的には自由です。ただし、著作権法上は自由であっても、ほとんどの場合、学問分野ごとに慣例があります。この慣例に従っていないと、正式な論文として認められないことが多いので注意が必要です。

●引用・参考文献の例

前述したように引用・参考文献の形式は、学問分野ごとに慣例があります。ここでは一般的な方法を数例あげておきます。引用文献は、その引用文章の後ろにかっこで括って示すか、脚注・後注などの方法で示します。脚注は各ページの下に、後注は章末や論文末にまとめて注を書く方法です。参考文献(文献リスト)は、直接引用としていなくても、論文に書くにあたって参考とした文献は全て含めます。

## 日本語の文献

- ・ 著者名 『書名』 出版社、 出版年、 ページ数。
- ・ 著者名 「論題」 編者 『書名』、 出版社、 出版年、 ページ数。
- ・ 著者名 「論題」 『雑誌名』、 巻号、 出版年、 ページ数。

## 例

- ・ 徳島子 『22世紀の徳島大学』 徳大出版、2100年、630-635頁。
- ・ 徳島夫 「徳島とアメリカ経済」 島田徳子編 『世界の中の徳島』、徳島の本社、2035年、230-235頁。
- ・ 島田徳夫 「徳島再生」 『四国巡礼』、286巻12号、2099年、36-54頁。

## 英語等の文献

- ・ 著者, 書名, 出版地 : 出版社, 出版年, ページ.
- ・ 著者, “論題”, 書名, 編者, 出版地 : 出版社, 出版年, ページ
- ・ 著者, “論題”, 雑誌名, 巻号, 出版地, 出版年, ページ

## ex.

- ・ Albert Black, Eugene Kevin, *History of Tokushima*, Tokushima : Tokushima Press, 2007, pp. 35-70.
- ・ Chadwick James et al, “Dryness of Yoshinogawa, ” in *Rivers in the world*, Adams, William(ed.), Tokushima : Tokushima Press, 2025, pp. 137-40.
- ・ Alda Patricia, “The great eruption of Bizan, ” *Journal of Tokushima*, Vol. 192, 1997, pp. 1162-70.

以上のような形式で記述します。ただしここで挙げたのは数例にすぎません。必要な項目や記述方法は、分野や学術雑誌ごとに全く変わってきます。例えば化学などの分野では、論題や終ページを省略するのが一般的です。さらに細かい書体や記号の使い方などは千差万別です。

## 第10章 論文を書こう

この章では論文の要件などを見てきましたが、この他にも論文を書く際には、必ず章・節といった階層構造にすること、客観的な文章で書くことなど、多くの決まりごとがあります。分野によって独自の決まりがあることも多いので、一度論文を書く前には専門分野の論文を読むことをお勧めします。担当教員の論文であればなお良いでしょう。そしてその論文の構成や引用・参考文献の書き方などを真似して書いてみましょう。

### ●論文作成のための図書リスト

最後にこの章を書くにあたって参考にさせていただいた図書を挙げておきます。また皆さんが論文を書くときに参考となる図書もいくつか紹介しておきます。徳島大学附属図書館で利用できる図書には、請求記号も記しておきます。

著者名 50 音順に並べています。[2]、[3]、[4]は、大変読みやすくできています。特に [3]は、論文形式のレポート課題で評価が悪かった、という人にはおすすりめです。レポートのどこが悪かったかが分かるのではないのでしょうか。[1]、[5]、[8]のように専門分野に絞った本もたくさんあります。論文の書き方の本では、分野について特に断りがない場合には、社会科学や人文科学よりの内容であることが多いので、自然科学分野の人は特に分野ごとの本を選んだほうが良いかもしれません。

[1]の著者は論文・レポートの書き方の本では定評のある方です。ただし、やや古い著書が多くなります。ここでは取り上げませんでした。この著者の「レポートの組み立て方」という本もおすすりめです。[9]は英語で論文を書く人向けの入門書です。皆さんにはまだまだ早いかもしれませんが、このような図書もあるということで挙げておきました。将来、大学院に進んで英語論文を書かなければならなくなったときに思い出して、手にとって下さい。

ここで挙げた以外にも、図書館にはたくさんの論文作成の助けとなる図書があります。OPAC で探してもよいですが、キーワードで探しにくい場合もあるでしょう。そんなときには直接、請求記号「816.5」の図書を置いてある場所に行ってみてください。新旧様々な図書に出会えます。是非ご利用ください。

## ●本章を書くにあたって参考とした図書

- [1] 木下是雄 『理科系の作文技術』（中公新書 624）第 22 版、中央公論社、1988 年。  
（本館所蔵 407||Ki または 080||Ch||624）
- [2] 河野哲夫 『レポート・論文の書き方入門』 第 3 版、慶應義塾大学出版会、2004 年。  
（本館所蔵 816.5||Ko）
- [3] 戸山田和久 『論文の教室 レポートから論文まで』（NHK ブックス[954]）日本放送出版協会、2002 年。  
（本館所蔵 816.5||To）
- [4] 山内志朗 『ぎりぎり合格の論文マニュアル』（平凡社新書 103）平凡社、2001 年。

## ●その他の論文作成参考図書

- [5] 小川雅彌監修代表 『化学のレポートと論文の書き方』 改訂版、化学同人、1999 年。  
（本館所蔵 430.7||Ka）
- [6] 小笠原喜康 『大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書 1603）講談社、2002 年。  
（本館所蔵 816.5||0g）
- [7] 斎藤孝 『学術論文の技法』 増補版、日本エディタースクール出版部、1988 年。  
（本館所蔵 816.5||Sa）
- [8] 高谷修 『看護学生のためのレポート・論文の書き方：正しく学ぼう「書く基本」  
「文章の組み立て」』 金芳堂、2001 年。  
（分館所蔵 492.907||Ta）
- [9] 野口ジュディー・松浦克美 『Judy 先生の英語科学論文の書き方』 講談社、2000 年。  
（本館・分館所蔵 407||No）
- [10] 樋口裕一 『やさしい文章術：レポート論文の書き方』（中公新書ラクレ 73）第 3 版中央公論新社、2005 年。  
（本館所蔵 080||Ch||73）
- [11] 吉田健正 『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方』 ナカニシヤ出版、1997 年。  
（本館所蔵 816.5||Yo）